

## 第二言語としてのインドネシア語習得における関係節理解の難易

鈴木 孝明<sup>†</sup> 青木 友香 大野 里咲 小野 百合香 曾我 瞳 若杉 祐加

京都産業大学外国語学部 〒603-8555 京都市北区上賀茂本山

E-mail: † takaaki@cc.kyoto-su.ac.jp

**あらまし** インドネシア語を学ぶ日本語母語話者を対象として、主語関係節、目的語関係節、受け身関係節の理解に関する難易を調査した。時限付き絵画選択法による実験の結果、主語関係節と受け身関係節は目的語関係節よりも理解が容易であるが、主語関係節と受け身関係節の正解率には統計的な有意差がないことがわかった。これらの結果と誤り分析から、第二言語習得におけるインドネシア語関係節の理解には、主要部と空所の距離に関する統語的な要因（構造的距離）と主要部と関係節における意味役割の出現順序に関する要因（写像性）が存在することが確認された。

**キーワード** 第二言語習得, 関係節, インドネシア語

## Some Difficulties in the Comprehension of Relative Clauses in Indonesian as a Second Language

Takaaki SUZUKI<sup>†</sup> Yuka AOKI Risa ONO Yurika ONO Hitomi SOGA and Yuka WAKASUGI

Department of English, Kyoto Sangyo University Motoyama-Kamigamo Kita-ku, Kyoto, 603-8555 Japan

E-mail: † takaaki@cc.kyoto-su.ac.jp

**Abstract** Focusing on subject relative clauses (SRs), object relative clauses (ORs), and passive relative clauses (PRs), this study investigated the second language (L2) acquisition of Indonesian by Japanese-speaking adults. By using a timed picture selection task, we found that the comprehension of SRs and PRs were easier than ORs, whereas there was no statistically significant difference between SRs and PRs. These results and our error analyses revealed that the L2 learners were affected by the syntactic factors rooted in the structural distance between the head and the gap, and by the perceptual and semantic factors that reflect the iconicity of language.

**Keyword** Second Language Acquisition, Relative Clauses, Indonesian

### 1. 目的

本研究では、第二言語習得におけるインドネシア語の関係節理解を調査した。日本語を母語とするインドネシア語学習者にとって、主語関係節 (SR: subject relative clauses)、目的語関係節 (OR: direct object relative clauses)、受け身関係節 (PR: passive relative clauses) の3つのタイプの関係節理解に難易の差があるかどうか、また、難易の差がある場合には、そこにどのような要因が考えられるのかを探ることが本研究の目的である。

インドネシア語は、インドネシアを中心に2~3千万人の母語話者がおり、第二言語としても約1億4000万人の話者が存在する[1]。しかしながら、日本におけるインドネシア語学習者の数は決して多くはない。大学における外国語学習に関して2012年に行われた調査では、対象となった674大学のうち、マレー・インドネシア語の授業を開講している大学は38校(5.6%)に過ぎず、履修者数も1,328人と、英語の91万5千人

以上という数と比べると、かなりの少数派ということになる[2]。また、言語学的に分析の対象となることはあっても、言語習得研究の分野(母語獲得および第二言語習得)でインドネシア語が扱われることは稀である。そこで本研究では、外国語としてインドネシア語を学習する大学生を対象とし、関係節の理解に焦点を当て、第二言語としてのインドネシア語習得の特徴を探った。

### 2. 関係節

#### 2.1. 関係節の構造

言語処理や言語習得(母語獲得・第二言語習得)の研究では、関係節の難易に関する調査が数多く行われている。その中でも頻繁に対比されるのが、主語関係節(SR)と目的語関係節(OR)である。英語の場合は、主語関係節(1)でも、目的語関係節(2)でも、主要部(head)である *the woman* が鍵カッコで示した関係節に

先行する。関係節内には下線で示した空所 (gap) があり、これが主語の位置にあるものを主語関係節 (SR) とよび、直接目的語の位置にあるものを目的語関係節 (OR) とよぶ。

(1) the woman [who \_\_\_ sees a man] (SR)

(2) the woman [who a man sees \_\_\_] (OR)

空所は、主要部と同一指標を持つ要素が存在していた場所で、この空所位置を特定化することによって、関係節を正しく解釈することができる。

インドネシア語の関係節も基本的に英語と同じ構造をもつ。下記 (3) と (4) が上記の英語に対応するインドネシア語の関係節である。

(3) orang perempuan [yang \_\_\_ lihat orang laki-laki] (SR)  
person female who see person male  
'the woman who sees a man'

(4) orang perempuan [yang orang laki-laki lihat \_\_\_] (OR)  
person female who person male see  
'the woman who a man sees'

インドネシア語でも主要部、*orang perempuan* は関係節に先行する。鍵カッコで示した関係節内は SVO の語順となるので、(3) の主語関係節では関係代名詞 *yang* の直後に空所があり、(4) の目的語関係節では、動詞 *lihat* の後に空所が存在する。このように、英語と同じように捉えられるインドネシア語だが、実際の使用に関しては、(4) の目的語関係節には大きな制限がある。すなわち、非文法的ではなが[3]、目的語関係節の使用頻度は極めて低く、多くの場合、目的語関係節の代わりに (5) のような受け身関係節が使用される[4]。

(5) orang perempuan [yang \_\_ dilihat oleh orang laki-laki]  
person female who is seen by person male  
'the woman who is seen by a man'

受け身関係節の空所は関係節内の主語位置にある。また、関係節内の動詞は受け身形になり、行為主を示すための *oleh* 'by' が動作主の前に置かれる。

## 2.2. 関係節の理解

英語を対象とした第二言語習得では、多くの研究が主語関係節の方が目的語関係節よりも産出や理解が容易であるという報告を行っている[5,6,7,8]。その要因として、主要部と空所の距離に関わるいくつかの仮説が検討されてきたが、現在では、(6) に示す構造的距離の仮説 (structural distance hypothesis) とよばれる提

案が広く支持される傾向にある[9,10]。

(6) 構造的距離の仮説 (structural distance hypothesis) : 統語操作において統語節点の通過点として計算される構造的な距離がその構造の相対的な複雑さを決定する。

構造的距離の仮説とは、主要部から空所までの埋め込みの深さに関する距離が関係節の難易を決定するというものである。埋め込みの深さは、主要部と空所の間に介在する統語節点の数に置き換えられるので、動詞句内にある直接目的語の空所よりも、動詞句外にある主語の空所の方が、より主要部に近いことになる。よって、主語関係節の方が目的語関係節よりも容易だという説明である。この仮説は、英語だけでなく、日本語[11]や韓国語[10]といった主要部後置型言語における第二言語習得研究の結果とも一致することから、関係節の習得を統語的観点から説明する提案として有力なものであるといえる。

一方、実際のヒトの言語運用には、事象の知覚やそれに関連する意味的な要素も影響することが知られている。たとえば、語順が比較的自由的な日本語の場合、幼児にとつて (7a) の方が (7b) よりも易しく[12]、(8a) の方が (8b) よりも易しいことが知られている[9,13]。

- (7) a. 女の子が男の子をたたきました。(動作主-被動作主)  
b. 女の子を男の子がたたきました。(被動作主-動作主)  
(8) a. シールを切手に貼りました。(主題-着点)  
b. シールに切手を貼りました。(着点-主題)

それぞれのペアでは、文中の名詞句が担う意味役割の出現順序が異なる。(7a) は「動作主-被動作主」の順番で出現するが、(7b) は「被動作主-動作主」の順番である。また、(8a) が「主題-着点」の順番であるのに対して、(8b) は「着点-主題」の順番である。どちらのペアでも易しいとされる文は、名詞句が担う意味役割の出現順序と現実世界で物事が起こる順番が一致しているものである。(7) では、動作主が最初に行動を起こして、被動作主に何らかの行為を及ぼす。(8) では、主題が移動を開始して、その後着点に至る。これを写像性の仮説として以下のように捉えることにする[13,14]。

(9) 写像性の仮説 (iconicity hypothesis) : 文の難易は、現実世界における物事の時間的な経過がどのような順序で表現されるかに影響される。

日本語だけでなく、英語でも、幼児はこのような事象の知覚に大きな影響を受けることが指摘されており[15,16]、さらに、第二言語習得においても、写像性の仮説を支持する結果が報告されている[17]。

そこで、関係節の理解も写像性の仮説という視点から捉え直してみることにする。(1) や (3) の主語関係節の場合、主要部が動作主という意味役割を担い、関係節内の名詞句（直接目的語）が被動作主となる。(2) や (4) の目的語関係節の場合は、これが逆になり、主要部が被動作主で、関係節内の名詞句（主語）が動作主である。よって、写像性の仮説によると、主語関係節は目的語関係節よりも易しいという予測をすることができる。このことは、主要部と空所の構造的距離という要因とは別に、写像性という要因が関係節の理解に影響を及ぼす可能性を示しているが、どちらの仮説でも主語関係節の方が目的語関係節よりも容易であることを予測するので、写像性の仮説の検証を行うことはできない。そこで本研究では、受け身関係節も対象にして、表 1 に示すような 2 つの仮説が関係節理解に及ぼし得る影響を予測する。

表 1 3つのタイプの関係節と2つの仮説

	空所位置 (構造的距離)	意味役割 (写像性)
SR	主語(短)	動作主-被動作主(写像的)
OR	目的語(長)	被動作主-動作(非写像的)
PR	主語(短)	被動作主-動作(非写像的)

受け身関係節は、統語的には主語関係節と同じ特徴をもつ。すなわち、関係節内に起こる空所は主語の位置にある。よって、構造的距離の仮説により、主語関係節と受け身関係節は同等に理解が容易だと予測できる。これに対して、受け身関係節は、意味的には目的語関係節と同じ特徴をもつことになる。名詞が担う意味役割は、目的語関係節と同じように「被動作主-動作主」の順番で出現する。よって、写像性の仮説により、受け身関係節と目的語関係節は同等に理解が困難だと予測できる。

さらに、インドネシア語独自の要因について2点付け加えておきたい。1つは、前述したように、母語話者間で目的語関係節が用いられることは少ないということである。この事実は外国語としてのインドネシア語教育にも反映されており、本研究が調査対象とした学習者の使用するテキストに、目的語関係節に関する説明や例文はなかった[18]。また、担当教員へのインタビューで、授業の中でも教員が目的語関係節をとりあげることはないことがわかった。もう1つは、受け身関係節もまた、調査対象となった学習者は明示的に

学習する機会が与えられていなかったということである。目的語関係節とは異なり、受け身関係節は主語関係節同様、母語話者に使用されている。しかしながら、初級～中級学習者にとっては複雑な文法事項として扱われているようであり、被験者が使用しているテキストで扱われることはなく[18]、授業においても、これに関しての指導は行われていなかった。すなわち、本研究で対象となるインドネシア語学習者は、主語関係節のみを明示的に学習しており、目的語関係節と受け身関係節に関するインプットを受け取る機会は与えられていなかったということになる。これらの事から、もしもインドネシア語学習者がインプットに従った学習をしているのならば、目的語関係節と受け身関係節は同等に困難だということが予測できる。

### 3. 実験

#### 3.1. 被験者

被験者は日本語を母語とするインドネシア語の学習者 19 名であった。全員が大学でインドネシア語を学習していたが、後述する予備テストの結果、19 名中 7 名が不合格となった。よって、分析の対象としたのは 12 名であった。

分析対象者はインドネシア語を専攻とする大学生で、全員が大学に入学してからインドネシア語の学習を開始した。学習期間は約 1 年 6 ヶ月であった。12 名中 11 名がインドネシア語検定の E 級を取得し、6 名が 3 週間以上のインドネシア留学を経験していた。また、全員が通常の学校教育で英語を 6 年以上学習していることから、インドネシア語学習は、厳密には第三言語習得ということになる。

#### 3.2. 材料と手順

予備テストでは、インドネシア語で書かれた単文を日本語に訳す翻訳問題を行った。予備テストの目的は、関係節テストで使用する語彙（名詞と動詞）と文構造（能動態と受動態）を習得していることを確認することである。よって、関係節テストで使用されている語彙をすべて用いて能動態の文と受動態の文をテストした。語彙と文構造の両方において 75%以上正解した被験者を関係節テストの分析対象者とした。なお、予備テストが関係節テストの結果に影響を及ぼす可能性を考慮して、予備テストは関係節テストの後に行った。

関係節テストでは、合計 22 の名詞節を用いた。その内訳は、(3) の主語関係節、(4) の目的語関係節、(5) の受け身関係節が各 4 トークンで、残りの 10 項目がディストラクターである。(3) ～ (5) の関係節は、文の中に埋め込まず、これらを単独で使用した。関係節に使用した名詞は、orang laki-laki（男性）、orang

perempuan (女性)、anak laki-laki (男の子)、anak perempuan (女の子)、guru (先生)、siswa (生徒)、kakek (おじいさん)、nenek (おばあさん) の 8 つで、動詞は lihat (見る)、cari (探す)、bantu (手伝う)、dorong (押す) の 4 つであった。これらを組み合わせて 3 タイプの関係節を作ったが、その際、関係節に使用する 2 つの名詞と動詞のペアは 1 度しか現れないようにした。

タスクは時限付き絵画選択法 (timed picture selection task) によるものであった。上記 (3) ~ (5) のような関係節をスライドに 8 秒間提示した。その直後にブランクのスライドを 8 秒間提示し、被験者はその間に、手元の回答用紙に示された 3 組、6 つの人や物の絵から関係節が示していると思うもの 1 つに丸をつけるように指示された。上記 (3) ~ (5) に対応する図 1 の例では、男性と女性のペアが 3 組示されている。そのうちの 1 つのペアでは、男性が女性を見ていて、別のペアではこれが逆に示されている。また、残りのペアでは、男女ともに何も行動を起こしていない。これらの絵を使用することにより、正解だけでなく、誤りのタイプを特定化できるようにした。また、3 組目の何もしていないペアを含めた理由は、被験者が関係節に提示された動作を理解し、ペア全体ではなく行動を起こしている個人 (個々の人や物) に丸をつけるという作業を確実にするためである [10]。なお、図 1 で示している (a) ~ (f) の記号は、ここで便宜的に付けたものであり、実際の絵には書かれていない。

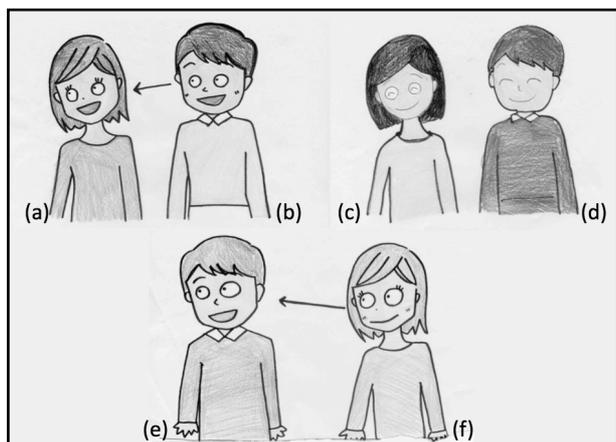


図 1 関係節テストに使用した絵のサンプル

実験は大学におけるインドネシア語の授業を利用して実施した。全体説明と練習問題を行った後、被験者全員が同時に関係節テストに取り組んだ。関係節の問題は、パワーポイントの自動切り替えを利用して提示し、問題を提示する際は、被験者の注意を引くために音声刺激 (カメラのシャッター音) を使って、画面切り替えの合図をした。11 問目が終わったところで小

休止をとり、残りの 11 問を行った。関係節テストの後に、予備テストである翻訳問題を行った。最後に、アンケート形式で被験者の個人的な学習経験等についての調査を行った。実験には全体で 20 分程度の時間を要した。

#### 4. 結果

予備テストの結果、語彙部門と文構造部門の両方で 75% 以上正解した被験者は 19 名中 12 名であった。よって、この 12 名の関係節テストの結果を分析した。

関係節テストの正解率は図 2 に示す通りである。反復測定分散分析 (Repeated-measures ANOVA) で 3 つのタイプの関係節における正解率を比較したところ、有意差がみられた ( $F(2,11) = 5.155, p < 0.5$ )。ボンフェローニ法による多重比較の結果、主語関係節と目的語関係節の正解率に有意差が見られ ( $p < 0.05$ )、目的語関係節と受け身関係節の正解率の差は有意レベルに近づいた ( $p = 0.081$ )。一方、主語関係節と受け身関係節の正解率の差は有意ではなかった ( $p = 1.000$ )。

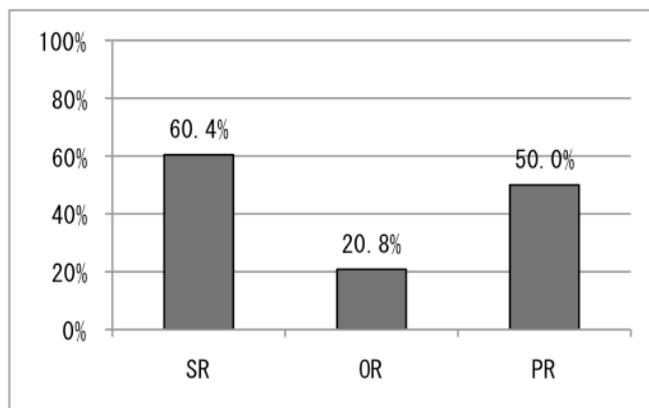


図 2 3 つの関係節の平均正解率

また、それぞれの関係節タイプの正解率に関して、チャンスレベルとの比較を行った。その結果、主語関係節 ( $t(11) = 5.524, p < 0.001$ ) と受け身関係節 ( $t(11) = 4.110, p < 0.01$ ) ではチャンスレベルよりも正解率の方が有意に高かったが、目的語関係節ではチャンスレベルとの有意差は見られなかった ( $t(11) = 0.457, p > 0.05$ )。これらの結果は、インドネシア語学習者にとって、主語関係節と受け身関係節は比較的容易だが、目的語関係節の理解は困難であるということを示している。

さらに、学習者が正しく関係節を理解できない場合にはどのような誤りが起こるのか、誤りのパターンを分析した。ここでは (3) の主語関係節「男の人を見ているその女の子の人」を例に、図 1 の絵に照らし合わせて見ていく。まず、正解は (f) の絵に丸を付けた場合である。これに対して、(a) に丸を付けたものを逆転エ

ラー (reversal errors) とした。逆転エラーの場合、主要部 (女の人) は正しく捉えられているが、関係節内の空所の特定化に誤りが起こったため、動作の方向が逆になる。よって、主語関係節が目的語関係節と解釈され、目的語関係節が主語関係節と解釈される。また、受け身関係節の場合は、能動態の主語関係節と解釈されることになる。次に、(e) または (b) の絵を選択した場合を主要部エラー (head errors) とした。これは、主要部を逆 (男の人) に捉えてしまう間違いだが、関係節内の動作主と被動作主の関係は、正解と同じように捉えられている場合とその逆の場合がある。最後に、(c) または (d) を選んだ場合、および複数の人物に丸をつけてしまった誤りをタスクエラー (task errors) とした。これらの回答を関係節のタイプごとに示したものが表3である。

表3 関係節テストにおける正解とエラーの比率 (%)

	SR	OR	PR
正解	60.4	20.8	50.0
逆転エラー	10.4	50.0	33.3
主要部エラー	20.8	14.6	8.3
タスクエラー	8.3	14.6	8.3
合計	100	100	100

ここから、誤りのパターンは関係節のタイプごとに異なることがわかる。目的語関係節と受け身関係節では、逆転エラーが最も多く起こっていた。特に、目的語関係節の場合は、回答の50%が逆転エラーであった。受け身関係節は目的語関係節より正解率が高くなる分、誤りの比率が減少しているが、それでも33.3%の回答が逆転エラーであり、これは正解の次に高い比率を示している。これに対して、主語関係節で多く観察された誤りは主要部エラーであった。逆転エラーも10.4%ほど見受けられたが、主要部エラーは20.8%とそれ以上に多く、この誤りが他の関係節タイプでは比較的少ないことを考えると、主語関係節に特有な誤りだということができるだろう。

## 5. 議論

関係節テストにおける全体的な正解率は、決して高くはなかった。しかし、ここでのタスクは6つの人や物の絵から1つの正解を要求するものなので、チャンスレベルは16.7% (1/6=0.1666) である。これを考慮すると主語関係節や受け身関係節の50%~60%の正解率は当該文法事項の未習得を示すものではないと考えられる。実際、これら2つのタイプの関係節における正解率は、統計的にチャンスレベルよりも有意に高かった。

これに対して、目的語関係節の正解率は20.8%であ

り、チャンスレベルとの比較においても有意差は認められなかった。また、分散分析における結果では、目的語関係節と受け身関係節の正解率の間に有意差は認められなかったものの、数値的には有意水準に近づいた。ここでは、これらの結果を総合的に捉えて(10)に示すように目的語関係節のみが、他と比べて理解が困難であったと考えることにする。

(10) 主語関係節 (SR) = 受け身関係節 (PR) > 目的語関係節 (OR)

この結果は、構造的距離の仮説によって予測される通りである。主語関係節と受け身関係節が同等に容易であったということは、この2つの関係節に共通する主語位置の空所が要因である可能性が高い。すなわち、主語の空所の方が直接目的語の空所よりも主要部に近いので、主語関係節と受け身関係節は、目的語関係節と比べて理解が容易であったと考えられる。さらに、受け身関係節の方が目的語関係節よりも容易であったという結果も、構造的距離の仮説が予測する結果である。

一方、誤りのパターン分析からは、写像性の影響を認めることができる。受け身関係節と目的語関係節に共通して起こる確率の高いエラーが、逆転エラーであった。これは、この2つのタイプの関係節で、「被動作主-動作主」の順番で出現する名詞句に付与された意味役割を、これとは逆に「動作主-被動作主」と解釈する誤りである。逆転エラーは、主語関係節にはあまり起こらず(10.4%)、受け身関係節に50%、目的語関係節に33.3%と高頻度で起こることから、写像性の仮説が予測する通りの結果であったといえるだろう。さらに、このことは、写像性の影響が主語関係節の正しい解釈に対しても働いている可能性を示唆している。受け身関係節と目的語関係節では誤りにつながる「動作主-被動作主」という順序が、主語関係節の名詞句では「動作主-被動作主」の順番で出現するため、正解に結びつくことになる。ただし、これだけで学習者の関係節理解が説明できるというわけではない。主語関係節と受け身関係節の正解率に有意差がなかったという事実は、構造的距離という要因によって説明されるべきものである。

主語関係節に頻繁に起こった主要部エラーは、主要部を取り違える誤りである。インドネシア語の場合、主要部は関係節よりも前にくるが、学習者はこれを主要部だと捉えず、関係節内の最後の名詞句を主要部だと捉えている。これは学習者の母語である日本語からの転移 (transfer) だと考えられる。日本語は主要部後置型言語なので、主要部が関係節に後続する。このよ

## 文 献

うな解釈のストラテジーを主要部前置型言語であるインドネシア語に当てはめると主要部エラーが起こることになる。このエラーが主語関係節に多く起こった理由は、インドネシア語の主語関係節は「名詞-動詞-名詞」の順番で、これが日本語の主語関係節および目的語関係節と同じパターンであること、さらに、受動態に使われる形態素(受け身動詞の形態素 *di-* や動作主を示す *oleh*) が現れないので、そのまま日本語の関係節に置き換えるストラテジーが働いたためだと考えられる。

最後に、インプットの影響について触れておきたい。前述の通り、学習者は目的語関係節と受け身関係節は学習しておらず、これらに関するインプットを受け取る機会もなかったと考えられる。それにもかかわらず、受け身関係節に関しては 50%もの正解率が得られた。これに対して、同じようにインプットを受け取っていない目的語関係節の正解率は 20.8%とかなり低かった。これらの結果は、インドネシア語学習者は、単にインプットに従って関係節を習得しているわけではないことを示している。受け身関係節に関しては、インプットからの情報がなくても、主語関係節同様に習得が可能だと思われるが、目的語関係節はこの限りではない。これは、受け身関係節と主語関係節に共通する統語的な要因、すなわち、主要部と空所の距離の近さが影響しているのではないかと思われる。

## 6. まとめ

本研究では、インドネシア語を第二言語として習得する日本語母語話者を対象に、3つのタイプの関係節理解を実験により調査した。構造的距離の仮説が予測する通り、主語関係節と受け身関係節の理解は、目的語関係節の理解に比べて容易であることがわかった。また、誤りのパターンを分析すると、受け身関係節と目的語関係節では逆転エラーが多いことがわかった。これは、写像性の仮説が予測する結果であることから、インドネシア語の関係節理解には、意味役割の出現順序に基づく写像性の影響も存在することがわかった。さらに、受け身関係節と目的語関係節に関するインプットが学習者に与えられる機会がなかったという事実を考慮すると、学習者はインプットのみに従って関係節を習得するわけではないことがわかった。

## 謝辞

実験文の確認とデータ収集に協力してくださったエディ・プリヨノさんとデウィ・クスリニさんに感謝いたします。

- [1] 梶茂樹・中島由美・林徹(編)『事典世界のことば 141』, 82-85, 大修館書店, 2009.
- [2] ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査 中間報告 教育機関編, 日本独文学会 ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会, 2013.
- [3] Cole, P. and G. Hermon. Subject and non-subject relativization in Indonesian, *Journal of East Asian Linguistics*, 14, 59-88, 2005.
- [4] Tjung, Y. N. Object relatives and the ease of passivization in Indonesian, Paper presented at the Congress of Indonesian Linguistic Society. 2009.
- [5] Gass, S. Language transfer and universal grammatical relations, *Language Learning*, 29, 327-44, 1979.
- [6] Doughty, C. Second language instruction does make a difference, *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 431-69, 1991.
- [7] Wolfe-Quintero, K. Learnability and the acquisition of extraction in relative clauses and wh-questions, *Studies in Second Language Acquisition*, 14, 39-70, 1992.
- [8] Izumi, S. Processing difficulty in comprehension and production of relative clauses by learners of English as a second language, *Language Learning*, 53, 285-323, 2003.
- [9] ウイリアム・オグレディー. 言語学的アプローチによる言語習得研究, *Second Language*, 1, 2-19, 2002.
- [10] O'Grady, W., Lee, M., and M. Choo. A subject-object asymmetry in the acquisition of relative clauses in Korean as a second language, *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 433-448, 2003.
- [11] Kanno, K. Factors affecting the processing of Japanese relative clauses by L2 learners, *Studies in Second Language Acquisition*, 29, 197-218, 2007.
- [12] Hayashibe, H. Word order and particles: A developmental study in Japanese, *Descriptive and Applied Linguistics*, 8, 1-18, 1975.
- [13] Suzuki, T., Cho, S., Lee, M., O'Grady, W., Song, M., and N. Yoshinaga. Word order preferences for direct and indirect objects in children learning Japanese, Paper presented at The 2nd International Conference on Cognitive Science and The 16th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society Joint Conference, 108-112, 1999.
- [14] Cho, S., Lee, M., O'Grady, W., Song, M., Suzuki, T., and N. Yoshinaga. Word order preferences for direct and indirect objects in children learning Korean, *Journal of Child Language*, 29, 4, 897-909, 2002.
- [15] Bever, T. The cognitive basis for linguistic structures, In J. R. Hayes (Ed.), *Cognition and the development of language*, 274-353, New York: John Wiley & Sons, 1970.
- [16] Gertner, Y., and C. Fisher. Predicted errors in children's early sentence comprehension, *Cognition*, 124, 85-94, 2012.
- [17] Ito, A. The interpretation of Japanese word order patterns by adult English-speaking learners of Japanese as a second language, *Applied Linguistics*, 28, 466-473, 2007.
- [18] 左藤正範 『超入門インドネシア語』 大学書材, 1997.